



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2022 Autumn NO.61

治癒のヒント

Case Report
Protocol

ダイジェスト版

「延命ではなく救命」
という
言葉に導かれて

特集

“美容医学”の切り札——
せん い が
線維芽細胞療法の
研究・開発に着手

免疫療法で
培ったノウハウを
再生医療で生かす



“美容医学”の切り札—— 線維芽細胞療法の研究・開発に着手

免疫療法で 培ったノウハウを 再生医療で生かす

「美容医学」という言葉をご存知でしょうか？

似たような言葉に“美容整形”がありますが、美容整形が体調とは無関係に“美しさ”を基準とした施術目的に偏りがちなのに対し、美容医学は“主に加齢などによって失われた、あるいは衰えた”自分自身の健康を取り戻すための医学といえるでしょう。

今回の特集は、珠光会が培った再生医療の技術を応用した美容医学——“線維芽細胞”療法について、米国法人蓮見国際研究財団理事長蓮見賢一郎先生、HASUMI 免疫クリニック事務長渋谷大介氏、蓮見再生医療研究所（旧蓮見癌研究所）研究員渡部柳子氏のインタビューをもとに解説します。

アンチエイジング医学の役割は
QOL(生活の質)を
向上させること

——[ICVS Tokyo Clinic V2]^{※1}では、本号（12頁）でもお伝えしている通り、すでに「培養上清液療法」^{※2}をはじめとする幹細胞を用いた再生医療を実施しています。今回新たに「線維芽細胞」を用いた「美容医学」分野の研究・開発に着手することですが、その理由についてお聞かせください。

蓮見先生「みなさまご存知のiPS細胞^{※3}が登場したのは2006年——。以来、再生医療はさまざまな方面で応用され、進化してきました。美容医学と呼ばれるフィールドも、その発展分野のひとつです。

美容医学は「アンチエイジング医学（抗加齢医学）」の一領域です。アンチエイジング医学は、「病気を治療する」という従来の医療とは異なり、「今現在の健康をより充実させる」ために用意された医学です。内科領域や脳神経科領域、泌尿器科領域など複数の診療科を網羅する複合的な分野（図1）であり、具体的には皮膚

※1 ICVS Tokyo Clinic V2：〒102-8578千代田区紀尾井町4-1 ホテルニューオータニ内 新紀尾井町ビル2F
電話03-3222-0567 / FAX03-6685-2672

※2 再生医療：失われた組織や臓器を、科学技術を用いて再生させる医学研究の総称。再生医学とも呼ばれる。再生医療を行う手法としては、クローン作製、臓器培養、多能性幹細胞（ES細胞、iPS細胞）の利用などがある。

クレオパトラと再生医療

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

世界の三大美女といえは、エジプトの「クレオパトラ」、中国の「楊貴妃」、ギリシャ神話の「ヘレネ」が有名です。日本ではヘレネに替わって「小野小町」が入っていますが、そもそも三大美女という考え方は日本独自のものだそうです。明治中期頃に高まりつつあったナショナリズムを背景に、マスメディアによってつくられた産物だといわれています。

この三大美女のなかで「絶世の美女」と謳われたのが、古代エジプト・プトレマイオス朝最後の女王クレオパトラ7世。フランスの有名な思想家バスキルが残した『クレオパトラの鼻がもう少し低ければ、世界の歴史は変わっていただろう』という言葉は、よく知られているのではないのでしょうか。

クレオパトラと美容に関する逸話は数多くありますが、有名なのは「39歳で亡くなるまで、彼女の肌は15歳のままだった」というもの——。スキンケアには相当気を遣っていたらしく、今でいうタラソテラピー（海洋療法）海水や海泥などを使った療法。デトックス効果などが期待できる）や、金糸を用いたリフトアップ（顔のシワなどを改善する美容整形の方法）、ハチミツやアロエを使った保湿法など、さまざまな美

容法が伝承されているようです。

そして、クレオパトラの時代から2050年余り経った現代——。美容に関するニーズは衰えを知らず、かつては王侯貴族しか手が届かなかった療法が一般化したこと、男性の需要が高まったことなどにより、ますます巨大化した感があります。

とはいえ、美容自体に対する考え方は、過去とは随分変わったのではないのでしょうか。以前は女性の、主に性的な魅力を磨き上げる手段だと捉えられていた美容は、科学文明の発達による価値観やライフスタイルの変容を受け、人生をより健康に、快適に生きるためのノウハウのひとつに進化したような気がします。

今号の特集でも触れましたが、ICVS Tokyo Clinic V2で本格化する再生医療による治療も、もちろん患者様一人ひとりの豊かな人生に資するものです。老化や事故などで傷んだ組織を再生し、失われた若々しさを復活させる再生医療は、高齢化が進む現代において、ますます身近で重要な存在になっていくでしょう。まさに、がんの免疫療法と対を成す、健康長寿を実現させるための必須の医学といえるのではないのでしょうか。

CONTENTS

2 思いの言の葉 Vol.55
クレオパトラと再生医療

3 特集
“美容医学”の切り札——
線維芽細胞療法の研究・開発に着手
免疫療法で培ったノウハウを
再生医療で生かす

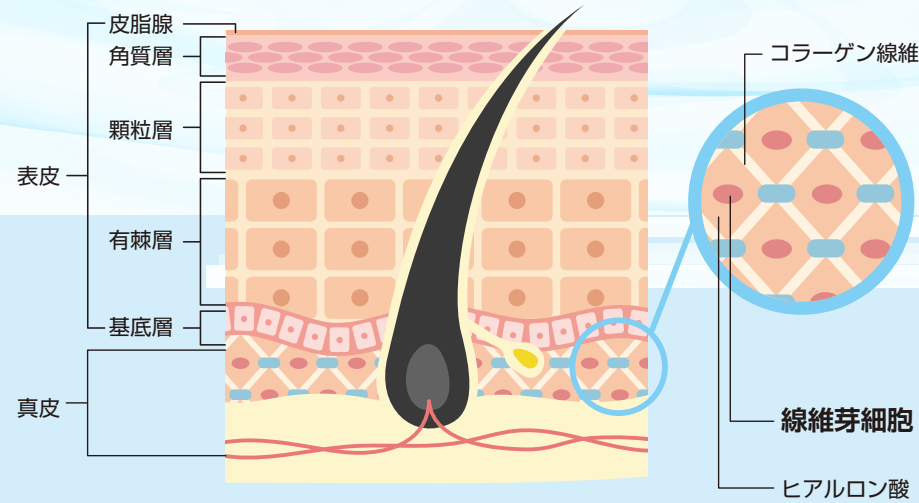
7 連載コミック
第56回 ほのぼのJiJi・BaBa 松 & 梅

8 治療のヒント
Case Report Protocol D 「延命ではなく救命」
という言葉に導かれて

12 医療とアンチエイジング——
“培養上清液療法”の
2つの成果で
充実の健康を得る

16 珠光会通信

図2 皮膚の真皮層に常在する「線維芽細胞」



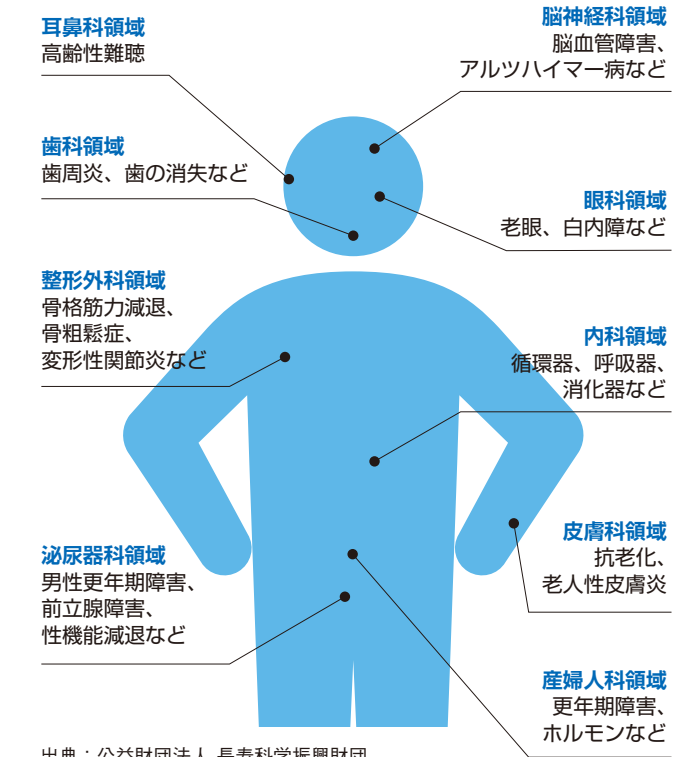
蓮見先生「線維芽細胞は、支持細胞と呼ばれる細胞のひとつです。支持細胞とは各細胞に対して、形態の保持などの物理的な支援、及び栄養の供給などの科学的な支援を行うサポート細胞のこと。今回の

について教えてください。



米国法人蓮見国際研究財団理事長
蓮見 賢一郎先生

図1 アンチエイジング 医学の取り組み



出典：公益財団法人 長寿科学振興財団
健康長寿ネットより改編

研究・開発対象は、皮膚の真皮層に常在する線維芽細胞です（図2）。

老化などによる皮膚の衰えは、肌のほりに関わるコラーゲン、同じく弾力のもととなるエラスチン、潤いをもたらすヒアルロン酸などが減少することが要因とされていますが、それらの美肌成分はすべて線維芽細胞が作り出しています。

線維芽細胞療法のプロトコルは、真皮層から線維芽細胞を取り出し、それをラボで数千倍に増殖させ、しわやたるみなどのお肌で気になる箇所の皮膚組織内に戻す——というもの。傷んだ皮膚を一層瑞々しく蘇らせる効果が期待できます」

——線維芽細胞療法のメリットというのはどんなことなのでしょう？

渡部「安全性と手軽さではないでしょうか」
渋谷「線維芽細胞療法で用いられるのは、自家細胞です。体にもなじみやすく副反応も少ないと考えられますので、高い有効性と安全性が期待できると思います」

渡部「線維芽細胞は怪我の修復などに関わる細胞ですので再生力が高い——。衰えた皮膚を蘇らせるにはうってつけでしょう。培地などの培養に要する資材も培養上清液療法よりは安価なので、その分施術料

科を中心に、口腔・顎顔面外科、再建外科などが含まれます。

今回我々が着手するのは、冒頭にご紹介いただいたように、線維芽細胞を用いた再生医療です。再生医療には高い細胞培養技術が必須ですが、我々珠光会グループには、HITV療法や幹細胞療法などで培った高度なノウハウが蓄積されています。

それらのスキルを活用すれば、必要とされる方々に一層ハイレベルな医療を提供できるに違いないという思いから、今回美容医学方面の研究・開発に至ったわけです」

渋谷「ご存知の通り、日本は超高齢化社会に突入し、2025年には65歳以上の人口割合が約30%、2060年には約40%に達するとみられています。

こうした状況は、特に医療や福祉の分野において、制度も含めた大きな変革を促しています。今後は、予防医療を中心と

して、どうすれば健康で快適に長寿を全うできるのか」という課題を解決していかなければなりません。その答えの一つになり得るのがアンチエイジング——美容医学ではないでしょうか」

——アンチエイジングには、QOL（生活の質）を向上させる力が秘められている、ということですね。QOLが向上すれば気持ちも前向きになる。気持ちが前向きになれば免疫力も活発になるという健康の好循環にはまるというわけですね。

渋谷「これまで私たちは、免疫細胞を活性化させるという方法で疾病を予防したり、細胞を若々しく保ったりしてきました。そうした体の内側からのアンチエイジングに、美容医学という体の外側のアンチエイジングが加わることで、健康の好循環が生まれるのではないかと考えています」

高い効果が期待できる自己由来線維芽細胞療法

——そもそも「線維芽細胞療法」とはどんな療法なのでしょう？ まずは、線維芽細胞



HASUMI 免疫クリニック事務長
渋谷 大介氏

金も抑制できると思います」

——今後研究・開発を本格化させるということですが、私たちが実際に治療を受けられるのはいつ頃になる予定でしょうか？

渡部「治療に必要な細胞を確保するためには、もう少し技術的な蓄積が必要ですね」
渋谷「治療開始は、2023年の春頃になるでしょうか。」

実際に患者さまに施術するためには、再生医療法にのっとり、厚生労働省へ再生医療等提供計画の提出が必要です。現在は培養方法の最終検討を渡部さんの方でしていただいておりますので、確定後、特定認定再生医療等委員会の審査を経て、

※4 超高齢化社会：65歳以上の人口の割合が全人口の21%を占めている社会。

※5 自家細胞：自分自身の細胞のこと。他人由来の細胞を他家細胞という。

※6 培地：細胞や微生物が成長しやすいように人工的に作られた環境のこと。寒天などで作られた個体培地や液体状の液体培地などがある。

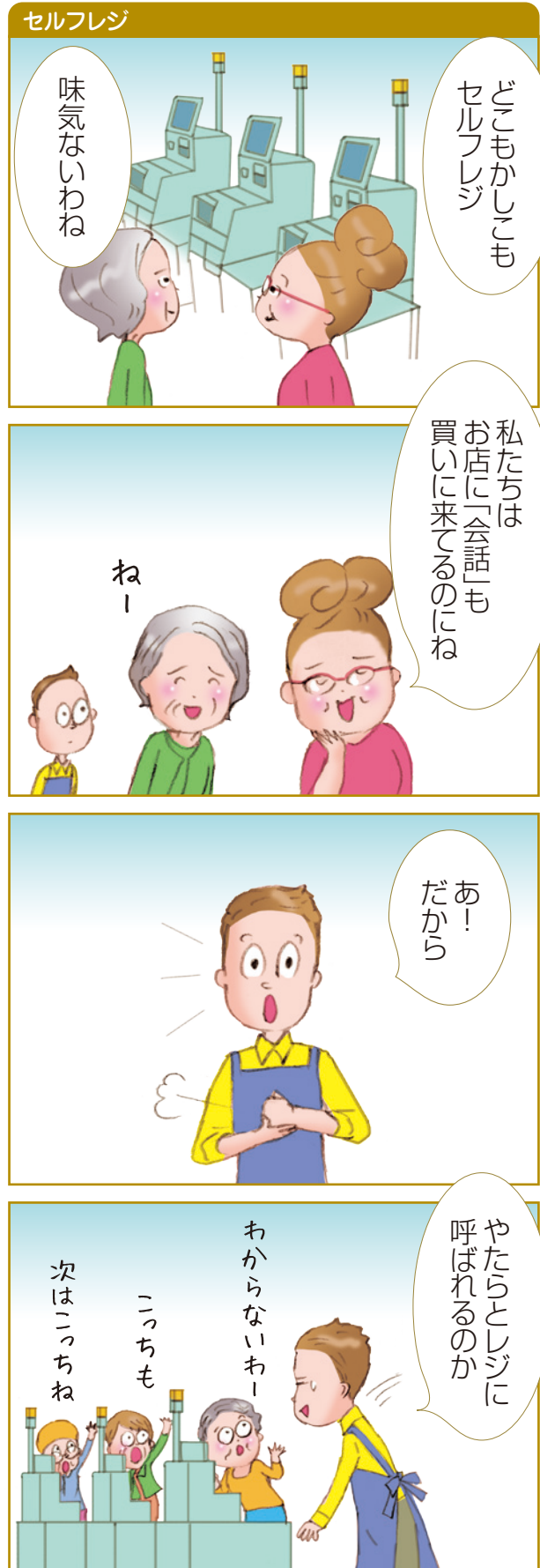
※3 iPS細胞：人工多能性幹細胞、誘導多能性幹細胞と呼ばれる細胞。皮膚などから取り出した細胞に遺伝子を組みこんで作られ、体中の各種臓器や組織に成長させることができる。同様の機能をもつES細胞（胚性幹細胞）と併せて万能細胞とも呼ばれる。2006年、京都大学の山中伸弥教授らがマウスの皮膚細胞から作製に成功した。

ほのぼのJiJi・BaBa
松 & 梅



小林 裕美子

マンガ家／イラストレーター
東京造形大学・デザイン学科卒業。イラストレーターとして、実用書や児童書、雑誌、WEB媒体、新聞等に挿絵やマンガを描いている。『美大デビュー』（ポプラ社）、『もち・ぼち』（徳間書店）、『親を、どうする?』（実業之日本社）、『私、産めるのかな?』（河出書房新社）、『親が倒れた! 桜井さんちの場合』（新潮社）、『産まなくてもいいですか?』（幻冬舎）等、著書多数。



蓮見再生医療研究所研究員
渡部 柳子氏

医療を流通させる
新組織

厚生労働省への提出を予定しております。本誌次号で治療の方法や料金もお伝え出来ると思いますので、もう少しお待ちください」

蓮見先生「今から76年前、1946年に開設した「蓮見癌研究所」は、珠光会グループにおける細胞培養の拠点として多大な実績を上げてきました。今回、研究・開発の振り幅を、がんの免疫療法から再生

医療全般に広げるため、名称を『蓮見再生医療研究所』に変更し、バイオテクノロジーの一層の拡充を目指すことにいたしました。

また、珠光会グループの医療技術をより速やかに、かつ円滑にみなさまへお届けするために、それらの流通を担う組織を新設しました。名称を「CELL株式会社」といいます。責任者には、珠光会グループの医療と患者様のご事情、両方に精通したHASM免疫クリニック事務長の渋谷大介に就いてもらいました」

それは大任ですね。CELL株式会社は、今後どんな活動をしていくのでしょうか?

渋谷「主に細胞培養の受託事業と幹細胞培養上清液の製造販売です。

培養受託については、外部医療機関がHITV療法の実施を希望した場合、治療に必要な樹状細胞などの免疫細胞の培養をCELL株式会社が担い、HITV療法の手順書とともに依頼元へ細胞をお届けします。これまでICVS東京クリニックを中心に珠光会グループでのみ施術されていたHITV療法が、他の医療機関でも実施可能になれば、患者さまがHI

TV療法を受けるきっかけが増えるのではないのでしょうか。

また、ご好評いただいております上清液治療についても、上清液の販売をCELL株式会社が請け負います。

珠光会グループで培った技術やノウハウを広く普及させることで、みなさまの健康に資すること——。これがCELL株式会社の役割だと考えています」

蓮見先生「以前本誌でも紹介させていただきましたが、米国人蓮見国際研究財団グループは早稲田大学と協働で、IRIS（アイリス）という医療用ロボットを開発しています。HITV療法には不可欠な樹状細胞をがん細胞へ直接注入するための穿刺を行うロボットですが、将来的にはIRISを加工細胞と併せて流通させることで、免疫療法の技術的なハードルをさらに低くしたいと考えています」

——本日は貴重なお話をお聴かせいただき、ありがとうございました。免疫療法の草分けとして培ったノウハウが、再生医療というフィールドで益々開花されることをお祈りしております。

※7 穿刺：組織の採取や薬剤の注入のため、体表面から体内、血管内、臓器内に針を刺し入れること。

「延命ではなく救命」 という 言葉に導かれて

竹田日奈さん(仮名) 53歳

ICVS 東京クリニックで施術される“HITV 療法”によって、第4期のがんから治癒へ向かっている方を取材し、回復へのターニングポイントを探る本シリーズ。今回ご登場いただく竹田日奈さんが宣告されたのは“直腸がん”でした。

「**抗がん剤**」しか治療法がない

竹田さんが最初に異変を感じたのは2年前——3月の終わりでした。排便時に出血に見舞われたのです。これは変だ……と思い、すぐに病院を受診しました。そして、検査後、その場で「がんを宣告」されたのです。

「ショックでしたが、出血した時点で“90%の確率でがんに違いない”と考えていました。ですので、宣告されたときはやっぱりそうだったか……」という思いが先に起りました。

実は母が「乳がん」を患ったのが、そのときの私と同年だったのです。私も気をつけなくては……と思っていた矢先の宣告でした」(竹田さん)

竹田さんが、がん宣告を受けたのは一般的な消化器病院だったので、手術を受けるために専門機能型病院へ転院したといいます。医師からは「術後3か月は縫合した部分を保護したいので人工肛門で対処させてほしい」と言われました。

「医師から“手術に要する時間は直腸がんの切除手術に4時間、人工肛門の手術が4時間、計8時間かかります」と説明されました。けれど、実際にはそれ以上かかったのではないかと思います。いずれにしろ、午前9時に手術室に入り、目が覚めたのは夜でした。

れるかもしれない……。病気になって初めて光を見つけた思いでした」(竹田さん)

HITV療法での治療を決意した竹田さん。けれど、専門機能型病院の方でも治療の予定が組まれていました。抗がん剤治療を受けるためのポートの埋め込み手術の日程が決まっていたのです。

「蓮見先生が専門機能型病院の担当医へお手紙を書いてくださったのです。『免疫療法を施術するにあたり、効果を一層確実なものにするために連携して治療を進められないだろうか』という内容でしたが、専門機能型病院の答えは厳しいものでした。『自院以外の治療を受ける場合、以後の容態については責任を持てないので転院していただきたい』というのです」(竹田さん)

専門機能型病院側の主張も、まったく理解し難いわけではありませんでしたが、患者の「救命」という考え方は次元を異にする言いでした。

しかし、ICVS 東京クリニックで治療に入った竹田さんには、感傷に浸っている間はありませんでした。アフエーシス^{※2}を経て、免疫細胞の培養に要する4週間の間に、蓮見先生と協働する専門機能型病院で放射線治療を受けました。

人工肛門については、説明を受けた時点では「しょうがないか……」という思いでした。でも、実際に使う段になったら、怖くてストーマ(排泄の出口)を見られませんでしたね」(竹田さん)

人工肛門は術後3か月で閉鎖する予定でした。しかし、不測の事態が起こってしまいました。術後の検査でリンパ節への転移が見つかったのです。

「リンパ節は切除したのですが、がん細胞が血液へ漏れ出した可能性があったので、抗がん剤を勧められました。5か月間(抗がん剤を)続けて終了したのが11月。人工肛門の閉鎖手術を受けたのは12月でした。

医師から「リンパ節までがんが及んでいたので、再発のリスクが上がった」と告げられたときは、やはりショックを受けました。抗がん剤はつらかったですが、「治りたい」という一心で耐えました」(竹田さん)

しかし、竹田さんの憂慮は現実のものになってしまいます。傍大動脈リンパ節^{※1}に再発が認められたのです。

「手術で取れない場所だと言われ、愕然としました。『治療法は抗がん剤しかないが、抗がん剤では治せない』というのです。突き放された感じでした。『じゃ、いつまで(抗がん剤を)続けられればいいのですか?』と質問すると『一生です』と返されました。10年続けているがまだ生きている人もいる……と」(竹田さん)

つらかった抗がん剤を延々と続けねばならない。そして、続けたとしても、その先に治癒の希望はない。絶望に打ちひしがれましたが、選択肢はありませんでした。ならば、抗がん剤治療を受けるしかない。——竹田さんがHITV療法の話聞いたのは、そんな厳しい覚悟を固めた頃でした。

免疫療法の可能性

「知人が蓮見先生と面識があつて。HITV療法について知らせてくれたのです。免疫療法という治療法があることすら知りませんでしたし、進行がんを治癒に導く可能性を持っていることなど、正直信じられませんでした。けれど、知人がICVS 東京クリニックのホームページを見てほしいと熱心に勧めてくれたので、閲覧してみたのです。——びっくりしました。HITV療法によって、第4期から治癒へ導かれた症例実績が複数掲載されていたのです。

私が感動したのは、蓮見先生の「私たちがめざしているのは延命ではなく救命です」という言葉でした。この先生なら私を救ってく

医療とアンチエイジング——

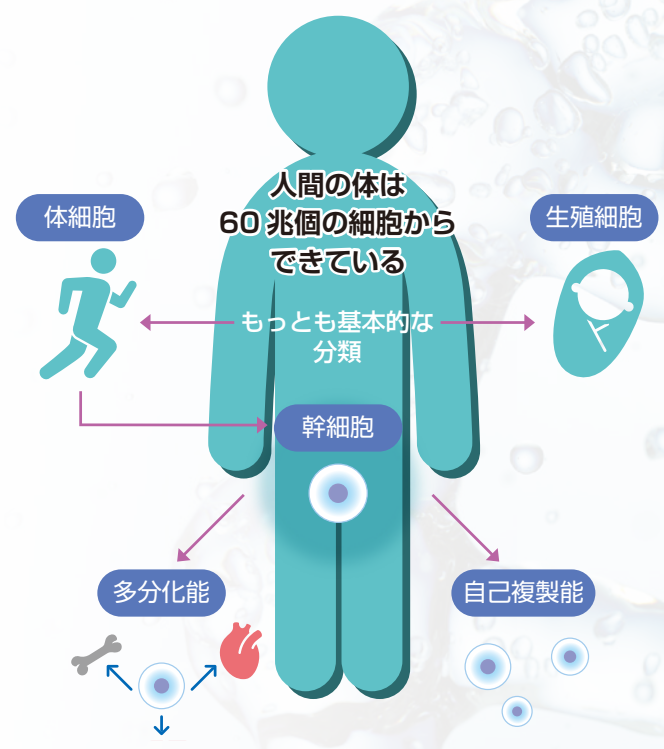
“培養上清液療法”の 2つの成果で 充実の健康を得る

再生医療は細胞や組織を用いる療法——。

これまで困難だった病気の治療などに対して新しい道を拓くものです。最先端かつ高度な医療であることから、“自分には関係ない”、“手が届かない”と最初から選択肢にない人も多いようですが、実は、私たちはすでにこの高度な医療が身近な社会で生活しています。

とくに幹細胞（後述）を用いた幹細胞療法の一つである“培養上清液療法”は、医療はもちろんアンチエイジングの面でも多くの成果を上げています。より健やかな生活、なりたい自分をもたらしてくれる“培養上清液療法”の2つの効果についてご紹介します。

図1 人間を形成する“細胞”の分類



「アフエーシスには4時間ほどかかりましたが、看護師さんがずっと付き添ってくれ、モニターなど細かくチェックしてくれたので心強かったです。

不安だったのは、樹状細胞を入れたあと腫瘍マーカーの値が下がらず、逆に上がってしまったことです。けれど、蓮見先生は冷静で、抗がん剤治療を併用したい」と言いました。そして、驚いたことに、（放射線治療を受けた病院で）抗がん剤治療を受けた直後、腫瘍マーカーの数値がガクンと落ちたのです」（竹田さん）

その後も腫瘍マーカーは順調に低下し、現在は正常値の範囲内に留まっているといえます。

「今年7月のCT検査では、しこりらしいしこりはすべて消滅していて、一個だけ残った腫瘍も縮小に向かってい」と言われました。蓮見先生の判断で抗がん剤も中断したので、2年数か月ぶりにがん治療から解放されたわけです。

今こうして取材に答えていることも、家族と幸福な時間を過ごせていることも蓮見先生の治療と出会えたからだと思っています」（竹田さん）



竹田さんには、ご家族との忘れられない思い出があるといいます。——「主人は自分の感情をあらさまに表に出すタイプではなく、竹田さんががん宣告を受けたときも、動揺する素振りは見せませんでした。

「専門機能型病院で、手術で（がんが）取れない状態」だと言われたとき、ひとりで町の写真館へ行き、肖像写真を撮りました。雑誌が何かで読んだ「亡くなった後、ご遺族が遺影にする写真がなくて困る」という記事を思い出したからです。出来上がった写真を主人に見せ、もしものときは、これを遺影にしてほしい」と言ったのです。そのときばかりは動揺したようで……。あんな顔の主人は初めて見ました」（竹田さん）

竹田さんは設計会社の事務担当として20年以上も勤務しています。その誠実で真摯な生き方が垣間見える凛としたエピソードではないでしょうか。

ご家族と一緒に温泉巡りをしたいという竹田さん。気持ちよさげに名湯につかる姿が目につかびます。

※1 傍大動脈リンパ節：腹部大動脈（みぞおち付近の位置にある、背骨の前を走る大きな血管）の周囲にあるリンパ節

※2 アフエーシス：免疫療法に必要な白血球（リンパ球・NK細胞・単球）などを採り出す工程

衰えた・傷ついた 細胞の回復、再生を促す

【幹細胞の修復・再生能力】

「病気を経験したのだから、痛みが残ってもしかたがない」、「長年酷使したからだに痛みがあるのも人生」、「年齢を重ねたら、シワは増え、肌はたるみ、髪も薄くなるもの」。

従来では当たり前の考えですが、これはすべて思い込みだった！ 実は、そんな時代がもう来ています。治療が困難な「痛み」のコントロール

や若返りの「アンチエイジング」に、再生医療の中でも幹細胞治療が効果を上げています。まずは、幹細胞の働きについて説明しましょう。

私たちのからだはおよそ60兆個の細胞でかたちづくられています。細胞にはさまざまな種類がありますが、もっとも基本的な分類では、骨や筋肉、皮膚などからだの組織を構成する「体細胞」と、精子あるいは卵子として遺伝情報を次世代へ伝える「生殖細胞」があります。このうち、体細胞の一種が「幹細胞」です。幹細胞には、もともとの幹細胞が構成している組織や

臓器と同じ細胞を修復・再生する「自己複製能」と、その他のいろいろな細胞に分化することのできる「多分化能」という2つの能力が備わっています（図1）。

ご存知のように私たちのからだは、古い細胞がそれぞれ一定の周期で新しく入れ替わる「新陳代謝」によって維持されています。また、傷やダメージを負ったときには、その部分に新しい細胞が再生し、修復します。これらは両方とも幹細胞の働きの一部です。

このようにして、幹細胞は私たちのからだの失われた機能を回復させます。また、痛みが軽

図2 失われた機能を取り戻す幹細胞の仕組み

幹細胞が損傷部位の機能を修復・再生させる主な仕組みを3つ紹介します。

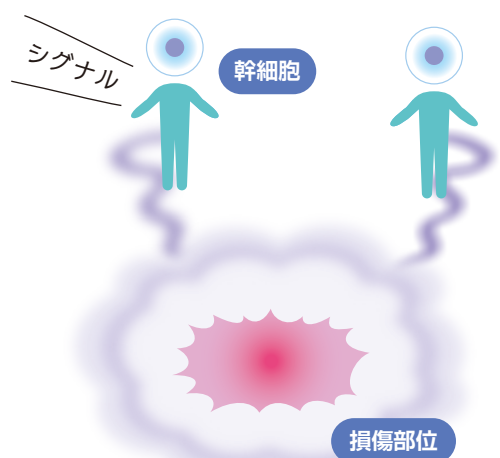
1 **ホーミング効果**……幹細胞が血管やリンパ管の中を移動し、自ら損傷部位を探し出してそこに集まり、修復・再生を促す。



2 **パラクライン効果**……幹細胞が放出する成長因子などが近隣の損傷部位の修復をする。



3 **エンドクライン効果**……幹細胞の成長因子などが離れた損傷箇所にもシグナルを送り、修復・再生を促す。

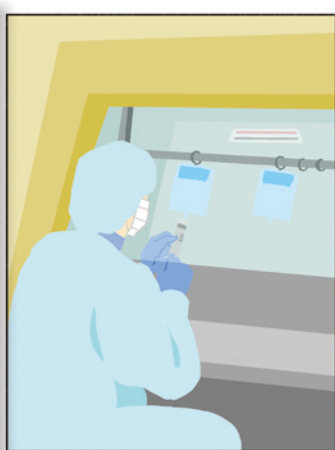


Laboratory



Illustration: はるうらら

Culture



Treatment



Healthy Beauty



減するのは、これらの作用が関与している可能性があります。加えて、末梢神経の先端にある受容器が、痛みの信号を受け取るプロセスに、幹細胞の放出するさまざまな生理活性物質が影響を及ぼして、痛みが軽減するという考えもあります。

【細胞の回復を促す】培養上清液療法

幹細胞治療には、患者様ご本人から採取した脂肪細胞から幹細胞を抽出して培養し、再び投与する治療法がありますが、今回ご紹介する「培養上清液療法」とは、幹細胞そのものではなく細胞を培養する際の培養液から、幹細胞を取り出した上澄み液である「培養上清液」を用いるものです。

幹細胞を取り出し、不純物を除去し滅菌などの処理を施した「培養上清液」は、ただの液体ではありません。幹細胞から放出された有益な生理活性物質、サイトカインがそのまま豊富に残されています。サイトカインは、低分子のタンパク質で、細胞間の相互作用（情報伝達など）に重要な役割を果たします。これまでに数百種類も発見され、免疫調整、神経再生、ウィルス増殖抑制などさまざまな生理機能を有していることが知られています。

培養上清液には、損傷部位の再生をサポートしたり、日焼けや老化などで衰えた細胞の回復を促したり、代謝を促進するなどの効果を有す

る500種類以上のサイトカインが存在しています。培養上清液を患部に注射したり、点滴で全身に巡らせることで、これらサイトカインの働きにより、さまざまな病気や不調の改善、衰えや損傷の回復をもたらすのが「培養上清液療法」です。

医療と美容、2つの側面で 困難な状況を打開

【医療面】痛みを「コントロールする」

医療のアプローチで「培養上清液療法」がもっとも注目され、確実な治療効果を上げているのが痛みのコントロールです。とくに痛みの中でも、患者様がなかなか実感しにくかった慢性的な痛みの改善に効果が現れています。

腰痛、五十肩や膝などの関節痛、あるいは肩こり、神経痛などこれらの痛みに対する従来の治療法としては、炎症を起こしている箇所に消炎鎮痛剤を用いたり、麻酔薬を使う神経ブロック療法、痛みの認知にアプローチする認知行動療法などの精神療法、また地道にリハビリを続けることなどが一般的です。これらの療法は、効果が出ても長期間にわたって痛みを遠ざけるのは難しかったり、認知行動療法などは効果が出るのに一定の期間が必要だったりします。

ところが「培養上清液療法」は、長年の腰痛

珠光会通信 Shukokai Communication

Information

HASUMI免疫クリニックに 『珠光会・メモリアルフォトブース』を設置

がんワクチンの草分けといえる『ハスミワクチン』——。開発者である故蓮見喜一郎博士がその研究に着手したのは1931年、今から91年前のことでした。現在までの総患者数は15万人以上。欧州、米国、中国など世界中の患者さんに愛用されるハスミワクチンを受け継いだ蓮見賢一郎先生は、まったく新しい発想と技術をもって次世代型免疫療法——HITV療法を開発。現在は初期タイプからさらに進化したHITV療法“プロトコールD”によって、進行がんで悩む多くの患者さんを救命しています。そんな珠光会の歴史を写真で鑑賞できるフォトブースが、HASUMI免疫クリニックの一角に設置されました。今では貴重な蓮見喜一郎先生のスナップ写真や世界各国で開催された「国際がんワクチン・シンポジウム」のポスターなど、当時を知る人には懐かしい、知らない人には新鮮な驚きを垣間見せてくれるコーナーになっています。ぜひご覧ください。



Information

医療機関様向けのお知らせ

6頁で触れたとおり、CELL株式会社は医療機関様向けに幹細胞培養上清液の提供、免疫細胞の培養受託を承ります。お問い合わせ・ご相談は下記までお気軽にお寄せください。

CELL株式会社

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町4-1 新紀尾井町ビル3F
TEL: 03-6413-5003 Mail: koizumi.r@cell-inc.org
細胞培養加工施設: CELL Bio Lab
施設番号: FA3220002

が施術の5分後には消えてしまうなど1回の治療で劇的に改善する人が多いのが特徴です。痛みの解消を実感するまで数回の通院が必要な場合もありますが、治療を受けた後に治療以前の痛みに戻る人はほとんどいないとされています。

具体的な施術としては、患部に培養上清液を注射します。痛みの箇所が多い場合は、点滴を用いて全身に巡らせることもあります。いずれにしても手術などとは異なり、施術も短時間で済むため、からだへの負担がほとんどないのも培養上清液療法の特徴です。

「美容医学面 美肌を取り戻し、薄毛や脱毛も改善」

「アンチエイジング」という言葉が生まれた当初、その意味するところは、いまの年齢の若さを維持すること、加齢による変化を最小限に抑えることでした。ですが、培養上清液療法が開発された今日、老化を抑える「だけでなく、若返り」が現実として期待できるようになったのが注目を集める理由です。

人の肌の細胞は一定の周期で生まれ変わる、いわゆる「ターンオーバー」の周期があります。20代ごろはおおよそ28日周期だったものが、40代では40日程度になってしまつといわれています。培養上清液に含まれるサイトカインには、シワの改善、皮膚の張りなどに効果があるといわれています。

ンシユリン様成長因子」や、シミ、くすみ、シワを改善する「上皮成長因子」などが多く含まれているため、肌の再生能力を蘇らせ「ターンオーバー」を促進し、美肌を取り戻すのです。治療では、幹細胞培養上清液を顔全体にまんべんなく注射します。通常の例では、1回の治療で1ccを注射するのが基本で、これを0.1ccずつ、10か所に注射することになります。とくに気になる箇所がある場合には、そこに集中的に注入する場合もあります。

治療を経験した人によると、注射といってもごく細い針を使うため、痛みはほとんどないそうです。治療を続けて2〜3か月で肌の透明感が蘇り、たるみが解消し弾力が出てきたという声も聞かれています。

薄毛や脱毛にも培養上清液療法は効果を上げており、難治性の円形脱毛症に対しても6割の人に効果があったという論文も発表されています。これは、培養上清液に含まれるKGF（ケラチノサイト成長因子）などが着実に働くためと考えられています。

**なりたい自分を
あきらめない**

疼痛コントロールの治療で、患者様がなによりも喜ばれるのは、痛みが続くことで集中できない

かったり、気持ちが落ち込んだり、希望が持てなかったりという精神的なダメージから解放され、生き生きと毎日を過ごせるようになること。

もちろん、アンチエイジングのための施術、薄毛治療のために培養上清液療法を受けた方も同様です。見た目の変化によって自信を失いがちだった人が、治療を受けることによって症状が着実に改善し、明るく自信に満ちて、毎日を楽しんでおられます。

再生医療は最先端医療であることには変わりはありませんが、日々進化することと安全性が確認され、また設備も整い、高品質な培養上清液が安全かつ安価に供給される環境が整ってきました。さらに法律等も整備され、より多くの人がこの医学の進歩の恩恵を受けられるようになりつつあります。

冒頭に書いたように「痛みがあるのが当たり前」「見た目の変化は、年齢を重ねればしかたがない」などとあきらめる必要があるでしょうか。本来の自分、なりたい自分ではつらつと毎日を暮らす。そのための選択肢の一つとして、内側から細胞を健やかにする培養上清液療法を積極的に取り入れてみませんか。

“培養上清液療法”についてのご質問は下記まで。どんなことでも、お気軽にお寄せください。
ICVS Tokyo Clinic V2 TEL: 03-3222-0567